なゆちこ。

黒やま

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
なゆちこ。

【Ｎコード】
Ｎ６５１８Ｘ

【作者名】
黒やま

【あらすじ】
四人の少女たちを主軸にした物語。
全国でも名を馳せている有名進学校、藤ヶ峰高校。
ここにはＦ４と呼ばれる四人の少女がいた。

～四人の少女の朝～（前書き）

初連載小説。

まだ内容はこれといって決まってませんが、

いろいろぶっこんでみたいなとは思っています。

～四人の少女の朝～

ピピピピピッ　ピピピピピッ

規則正しい目覚まし時計のアラーム音が鳴った。

カチッ

時計のアラームを消して、すっとベッドから身を起こし、

カーテンを開け朝日を体中に浴びて一回伸びをする。

「今日もいい天気。」

目を細めながら少女はいった。

杜崎（もりさき）　菜穂子（なほこ）だった。

着慣れた制服に着替え、

ボブカットの真っ直ぐな黒髪を

丁寧に櫛で梳かして朝食を摂りに階下に向かう。

朝食をすませて一服すると、

いつもと同じく余裕をもって家を出た。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・

ピッーーーーー、ピッーーーーー

携帯電話のアラーム音が部屋中に鳴り響いていた。

「ん～～。もう少し・・・むにゃむにゃ。」

鷹野（たかの）　琴子（ことこ）は未だ夢の中のようだ。

起きる気配はまったくみられない。

彼女が起きるのはこれから一時間後のことだった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・

気づくと、そこは見覚えのない廃墟であった。

「あれ～？　またやっちゃたのかな・・・。」

三木（みき）　千世子（ちよこ）は枕ひとつ抱いて

寝てる間に移動してしまったのだった。

「戻れるかな～。まっ、歩いてればそのうち辿りつくか。」

と、とりあえず外につながる出口に向かって

とぼとぼと歩いていくのであった。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・

永山（ながやま）　侑子（ゆうこ）は朝から道場で稽古をしていた。

・・・が、

グゥ～～～～～～～～

「腹減った・・。」

シャワーを浴びて、朝から米三合を平らげた。

なんという食欲なのだ。

「うーん。食った、食った。あっ、ちょうど学校行く時間。さっすがあたしの腹時計！ちゃんと計算してるんだな。」

そして手早く制服に着替えると

勢いよく扉を開け学校へと向かっていくのであった。

第一話　Ｆ４（前書き）

なんか書いていくうちにとりあえず一通り人物を紹介していくだけになった気がする・・・。次の話へと橋渡しがあんなんでいいのか。

第一話　Ｆ４

藤ヶ峰高等学校　　二年三組

教室は朝からにぎやかだった。

朝は常に余裕をもって学校に登校してくる菜穂子(なほこ)は

一時間目の授業の用意をしていた。

「ぐっもーにんっ！！」

元気よく教室の扉をくぐり抜けてきたのは侑子(ゆうこ)。

腰まで届く長く真っ直ぐな黒髪をひとつに結っている。

切れ長な目、くっきり整った眉といった顔立ちに長身のナイスバディ。

「おはよう。今日も朝稽古？」

侑子は菜穂子の左隣の席に腰を下ろす。

「そう！やっぱり朝から体動かすと心が落ち着くからな。」

彼女の家は歴史ある剣道道場を営んでおり、幼い頃から剣道を習っている。

「ちょこは？まだ来てない？」

侑子が尋ねたその時、また扉が開いた。

「ぐーてんもるげん。」

と金髪の美少女登場、というか千世子(ちょこ)。愛称『ちょこ』

「何でドイツ語・・・。」

と軽くツッコミを入れる菜穂子。

色素の薄いサラサラヘアーをなびかせ、

眠いのか長いまつ毛を伏せ琥珀色の瞳に影を落としている。

「ちょこ。今日はどこにいたんだ?」

「今日はねぇ〜、廃ビルだった。」

あはは、と笑う千世子。

「相変わらずね。ちょこは。」

何も知らないで聞くと不思議な会話だが

千世子には寝てる間に徘徊してしまう癖がある。

それも重度な徘徊癖で家の外へ出てしまい

気づくと知らない場所に辿りついてるのだ。

しかし当の本人は全く意に介さない様子なので
彼女らどころか家族でさえも心配しない。

キーンコーン　カーンコーン

そうこうしている間に予鈴が鳴る。

数十秒後、

ダダダダダダッと廊下に響く足音。

ガラガラッッ

勢いよく扉が開いて最後の生徒が入ってくる。

「おはよう！！今日はぎりぎり、ギリギリじゃなかったよ！」

いつもは本鈴とともに教室に入ってくる彼女は嬉しそうに言った。

「琴子（ことこ）。予鈴が鳴った後だから遅刻ギリギリに変わりはないんじゃないかしら。」

ツーサイドアップにまとめた黒髪がパタパタと揺れている。

くりっとしたつぶらで大きな瞳。

髪と同じ漆黒の瞳に見つめられると誰もが吸い寄せられてしまう。

それとは対照的に肌は真珠のように真っ白くまるで日本人形である。

なのだが・・・・・

ズタッ！！

琴子は一歩足を踏み出した途端、何もないところですっ転んだ。

「いったぁーい・・・」

中身は天然ドジッ子。

「もう、琴子ったら。」

菜穂子はクスリと笑う。

そんな四人に侑子の前の席の背の低い少女が声をかけてきた。

「やっとＦ４のお揃いね。」

彼女の名前は五辻（いつつじ）　涼子（すずこ）といい、このクラスの学級委員長を務めている。

くるくる巻いた髪をサイドでひとつに束ねていて、
愛らしい容姿なのだがあまりにも負けん気が強いため近づいてくる男はいない。

涼子が言っていたＦ４というのは菜穂子ら四人の総称である。
この四人は名物高校生で、ここら一帯では名前を知らないものはいない程有名人なのだ。
約一年前、彼女たちの入学には衝撃が走ったという。
Ｆ４の由来は藤ヶ峰高校の『Ｆ』とＦＬＯＷＥＲ＝花で
花盛りの少女という意味で名づけられたのであり決して某有名漫画のパクリではない。
また彼女らにはその由来からそれぞれ別称がつけられ
侑子は『牡丹の君』　千世子は『白百合の君』　琴子は『芍薬の君』
菜穂子は『藤の君』
そんな彼女たちのことを今はまだ知らない。
これから四人のほのぼのはちゃめちゃ高校生活が明かされていくことになるだろう・・・

第一話　Ｆ４（後書き）

恥ずかしや、、、

第二話　クッキーはプレーンが一番（前書き）

サブタイトルあまり関係ありません。

第二話　クッキーはプレーンが一番

季節は風薫る五月、五月晴れの空に鯉のぼりが元気よく泳いでいる。

「というか前回の私の出番少なくない！？」

「いきなりそんな台詞から入らなくても・・・」

初っ端から五辻涼子（いつつじすずこ）が菜穂子（なほこ）に喰いつく。

「しょうがないじゃん～。五辻は脇役なんだから。」

千世子（ちよこ）は平気で酷いことをサラッと言ってしまう。

「はぁ！？三木何それどういうこと！」

「ちっ違うよ。すずちゃんは脇役より・・・えっとヒラって感じだよ。」

「ヒラって琴子（ことこ）それフォローになってないだろ。」

琴子の天然ボケに侑子（ゆうこ）がツッコむ。

「それよりも五辻さん、さっき伊東（いとう）先生が呼んでいたわよ。行かなくていいの？」

伊東というのは彼女らの担任教師である。
彼女の扱い方が上手い菜穂子のおかげで涼子はしぶしぶ伊東のもとへ行った。
「ふぅー、これで落ち着いてごはんが食べれるね。」
只今昼休み中、屋上で昼食の途中である。
今日のように天気のいい日は毎回四人で屋上ランチがお決まりなのだ。
「あれぇ？侑子、何食べてるの？」
千世子が侑子が持っている手作りクッキーらしいものを指さす。
「ん？あっこれはさっき後輩からもらったんだ。」
「相変わらずモテモテですねぇ～。このこの。」
千世子が侑子を肘でつつく。
侑子はそのルックスと姉御肌という気質で特に後輩からは大人気。
女子の後輩からは憧れを下級生の男子からは尊敬の念を抱かれている。
「だって侑子ちゃんかっこいいもん。この前なんてひったくり犯をグワッと。」

琴子がジェスチャーで背負い投げの真似をしてみせた。

侑子の家は剣道道場を営んでおり彼女は永山一刀流（ながやまいっとうりゅう）の跡継ぎである。

そのため幼い頃から剣の修行を重ねてきている。

彼女が凄いのは剣術だけでなく柔道・弓道もこなすいわば武道の達人なのだ。

「あたしはただ偶々その場にいただけだから。」

侑子は豪快に笑う。

「本当侑子ちゃんって後輩にモテるけど好きな男の子とかいないの？」

何気ない琴子の質問に侑子の手が止まる。

「・・・・・いない、そんなの。」

「ちょっと～今の間は何ぃ？」

こういう話には疎い侑子だが今日は何か違った。

「何かあったの？」

菜穂子の優しい問いかけに侑子が切り出す。

「実は・・・」

「「「「えーーーーー！！！」」」」

第二話　クッキーはプレーンが一番（後書き）

何とまぁ微妙な終わらせ方。

第三話　初物に気をつけよ（前書き）

侑子さんに何が起こったのか・・・

第三話　初物に気をつけよ

それは突然だった。

「侑子(ゆうこ)ちゃん、ラブレターもらったの！？」

「あんびりーばぶる。」

「あの男勝りな侑子がね。」

三人とも言いたい放題だ。

「あたしだって最初冗談かと思ったんだ。同性からも異性からもファンレターとかもらったことはありはしたが、おっ男からこんな手紙が来るなんて・・・」

手には白い封筒がにぎられており便箋の最後に『帯刀(おびなた)　達人(たつと)』と記してあった。

話によると昨日学校から帰るとき下駄箱を開けたら入っていたという古典的な手法であった。

手紙には今日の放課後に体育館裏で待っているというこちらもいかにも王道と呼べるやり方であった。

「なんだかいかにも強そうな名前よね。」

菜穂子(なほこ)は宛先人の名前を眺めていた。

続いて千世子が読み上げる。

「帯刀達人、刀を帯びている達人。」

「でもっ剣道やってる侑子ちゃんにはぴったりなお名前だよね。」

琴子は一人うんうんと納得していた。

「ぴったりって、名前だけで決めちゃよくないわよ。」

「いいんじゃない？侑子には強い男がお似合いだよ～。」

「でも侑子ちゃんより強い人ってそうそういないよ。」

三人でワーワー盛り上がっていると

「あっー！！もういい、自分でなんとかするから。大体こんな手紙を出してくる自体男らしくない。あたしがきっぱり断ってやる。」

頭を掻きむしってもうこの話はおしまいとばかりに勢いよく弁当をかきこむ侑子。

しかし三人は黙って見過ごすことはなかった。

放課後三人は行動を開始した。

「一体どんな人なんだろぉ。わくわくするね～。」

「でも侑子行く前からあんなにかちこちに固まっててちゃんと返事できるのかしら。」

「大丈夫だよ。いざというときは侑子ちゃんの必殺山嵐でちょちょいのちょいだよっ。」

「いや、倒しちゃだめよ。」

侑子は同手同足で歩き体育館裏に向かっていた。

それはまるでロボットのようであり普段の彼女の姿からは微塵のかけらもない。

周りの人間も奇怪な目を向けていた。

そしてその後ろにこそこそと隠れている三人にはさらに奇怪な目を向けた。

侑子がたどり着いた時にはまだ帯刀達人は来ていなかった。

「あんなに緊張している侑子は初めて見るよ。乙女だねぇ～。」

千世子はなんだか楽しそうに笑う。

「ちょこちゃんなんだか楽しそうだね。」

「だってこんな侑子はなかなか見られないし、秘蔵映像だよ。」

「ちょこ・・・。」

「あっ誰か来たよっ。」

現れたのは一年の徽章をつけた男子生徒だった。

が、その男子生徒は想像していた姿とは全く違った。

一言でいうと名前負けしていた。

低い身長に眼鏡体型はガリガリでもやしという言葉がまさにぴったりの男だった。

「・・・あれが帯刀達人？」

千世子は信じられないというような顔をしていた。

「どうやらそうみたいよ。」

「えー・・・。」

琴子も相当驚いたらしく唯一冷静なのは菜穂子だけだった。

当の侑子も驚いてはいたが少しして呼吸を整え一歩前へ出た。

改めて見ると達人は彼女より十センチ以上も低く侑子が見下ろす形になっていた。

最初に口を開いたのは達人の方であった。

「本当に来てくれたんですね。嬉しいです。」

「あぁ・・・。」

侑子の返事は硬いものだった。

「いきなり本題に入りますが、永山先輩。」

「はい！」

シャキーンと背筋を伸ばすとさらに身長差ができていた。

侑子の緊張は最高に達していた。

「あの・・・」

「「でしごにめんしてくだなさい！！」」

同時に言葉を発したせいで何を言ったのか分からなかった。

「え？今なんて・・・。」

「弟子にしてください、と。」

「でし？」

「はい！僕よくもやしっていわれてからかわれるんです。どうして

も男らしくそして強くなりたいと
常日頃思っていて、この学校で一番強い永山先輩に弟子入りをしようとお願いに来たのです。
初めて永山先輩の剣道試合を見た時それはそれは大変な感動を受けましてですね・・・」
開いた口が塞がらないのか言葉が出ない侑子の前で一人キャッキャッと彼女の武勇伝に盛り上がる達人。
「あの、永山先輩？」
喋らない侑子が心配になった達人が顔を覗き見るといきなり腕を掴まれ
「あっ！山嵐！！」
琴子が言ったのと同時に達人に侑子の技がかけられたのであった。
それは素早くかつ華麗であった。
「まさか弟子にしてだったとはね。」
「もしかしたら初めての告白になるのかもしれなかったのに～。残念。」
侑子はすっかりのびきった達人を残しやるせない気持ちでその場を後にした。
その姿もまた男らしかった。

第三話　初物に気をつけよ（後書き）

ちゃんちゃん。

第四話　美少女は猫娘（前書き）

美少女って言葉使いすぎました。

第四話　美少女は猫娘

「三木(みき)さん、ずっと前からあなたのことが好きでした。付き合ってください！」

「ごめんなさい。」

彼の一世一代の告白も虚しく千世子(ちよこ)は見事にフッた。

彼女、千世子は世間一般的に言うといわゆる美少女の類に入る。

美少女と一口にいってもピンからキリまでいて世の中には美少女と形容される少女はそう少なくない。

だが、千世子はいうなれば美少女の中の美少女であった。

艶やかな金髪に琥珀色の瞳、人形のような整った顔立ちに加わり鈴の音が鳴るような声と相まって

彼女の魅力があふれている、まさに傾城(けいせい)の美女という言葉がふさわしい。

街を歩けば誰もが振り返りスカウトされたことは数えきれないほどである。

そのため彼女に愛の告白をしてくる者は後を絶たない、今年もこれで十何回目のことやら。

だが今まで彼女の目に留まった者はいなかった。というのか興味が

ないのである。

「じゃっそういうことだから。」

用事はこれで終わりかみたいな顔をしてスタスタと教室へ帰っていった。

それがいつもの千世子である。

「ちょこ、もう少し柔らかく断ってあげればいいのに。
いつも思うんだけど相手の人が可哀想で仕方がないわ。」

「いいじゃん。分かりやすくてさ、菜穂(なほ)もいざって時はきっぱり断った方がいいよ。」

いつものことだが菜穂子(なほこ)はあきれてしまう。

「菜穂子は男の方まで心配しすぎなんだ。確かにちょこの振り方は荒いけど。」

「この前の侑子(ゆうこ)の振り方も随分と荒っぽかったよねぇ。あっ、あれは振るっていうか
投げるって方が正しいか。」

「ちょこ、お前は・・・。」

千世子のきれいな額に侑子のデコピンがお見舞いされ

彼女の透き通った白い肌は痛々しく赤く腫れてしまった。

「酷い～。何するのさ。」

両手で額を押さえ涙目だ。

「おっ落ち着いて、ちょこちゃん。はい、チョコあげるから。」

「ちょこにチョコってダジャレか？おもしろくないぞ。」

「違うよー！これはたまたま持っていたのがチョコレートだったのっ。」

恥ずかしそうに顔を赤らめながらも粒チョコを渡す琴子（ことこ）の手のひらから

すっかり涙が引いた千世子がチョコをつまむ。

「ん～、美味しい。幸せ。」

さっきまで泣いていたのが嘘だったかのような変わりようである。

「自由奔放って感じよね、ちょこって。」

「うん、まるで猫みたい。」

「だな。」

チョコに夢中になりながらも三人の話を聞いていたのかこちらを向いた千世子は

「にゃ？」

と猫の鳴き声を真似てみせ、ちょうどその時口の端にチョコがついていた。

その愛らしさは女も胸を打たれるほど強力なものであった。

「「「かっ・・・・・可愛いっっっ。」」」

思わず三人もときめいてしまった。

第四話　美少女は猫娘（後書き）

ちなみに普通のチョコよりホワイトチョコの方が好き。

第五話　とある少女の日常（前書き）

忙しい朝の一幕

第五話　とある少女の日常

目覚めると時計は八時半を過ぎていた。

またやってしまった、琴子(ことこ)はピョンと跳ね起き急いで着替えようとするが

どうしてかこういう時に限って手間取ってしまう。

「リッリボンがぁー・・・」

ヘニャッと不格好なリボンを直したい気持ちはやまやまだが

このままでは遅刻大決定なので仕方がなくそのまま出かけることにした。

家から走っていけば十五分で学校にたどりつく、今日はいつもより余裕であろう。

そんなことを思って走っていたら目の前に見知った老人がいた。

「あっ、廣田(ひろた)のおじいちゃん。おはよっ！！」

「おぉ、琴ちゃん。朝から元気だねぇ。」

近所に住んでいる老人で一人暮らしをしており

琴子は顔見知りでよく家に遊びに行かせてもらっている。

「最近見てなかったけど風邪でもひいてたの？」

「いやいや、わしは健康そのものじゃ。ちょっと息子たちの顔を見に行ってたのさ。」

「あっーたしか永田町に住んでるんだよね。息子さん家族元気にしてた？」

「息子も嫁も孫たちも元気だったよ。それよりも琴ちゃん学校行く途中じゃなかったのかい。」

「あっー！！そうだった、またねおじいちゃんっ。」

ただの近所の仲の良い老人だと思い込んでいる琴子は手を振り学校への道を急いだ。

その老人がかつて日本の改革を行った総理大臣として名高く今でも政府に影響がある

人物だとは知らずに・・・・・

立ち話をしてしまったせいで時間がない、授業開始まで残り十分だ。急がなくては。

グゥ〜

「おなかへったよ・・・。」

いつものことだが朝はご飯を食べる時間ももったいないため朝食抜きで学校へ向かう。

だがそんな彼女の前に女神が現れる。

「あら、琴ちゃん。おはよう、今日はサンドイッチにしてみたの。」

ここを通っているうちに知り合った通学路の途中にある大きな家の奥様である苑子(そのこ)から

新鮮な野菜にハム、卵がふんだんに使われたサンドイッチを受け取った。

「んーおいひい。やっぱり苑子さんの料理は最高。」

「琴ちゃんにそう言ってもらえて嬉しいわ。音無(おとなし)、紅茶を。」

苑子の隣に控えていた執事・音無がいつの間に淹れたのだろうか

香りのよい紅茶を琴子に差し出した。

「音無さんもありがとう。」

ここの家の庭で朝食を摂るのがすっかりお決まりになってしまった

琴子はこの時ばかりは

時間のことも頭の片隅においやってしまう。

なのだが、

「鷹野(たかの)様、そろそろお出になりませんとお時間の方が。」

音無の言葉に現実に引き戻されて腕時計に目をやると

授業開始まで残り五分となってしまっていた。

「わっ！じゃっ行くね。ごちそうさまでしたっ！！」

「明日も待っているわ。」

お礼を言いお屋敷を後にすると猛ダッシュした。

「美味しい朝ごはんが食べれるのはいいんだけど、もっとゆっくり食べたいよ。」

毎度毎度のことながらもっと早く起きればいいだけのことだがそれが出来ないのだから苦労している。

そこの角を曲がれば校門というところでまたしても知人に出会ってしまった。

しかも泣いているものだからほっとくことができなかった琴子は声をかけた。

「樹(いつき)くんどうしたの？怪我しちゃったの？」

琴子が声をかけた少年、樹は目を真っ赤にして泣いていた。

「琴姉ちゃん。あのねお母さんがせっかく買ってくれたハンカチが・・・」

樹の小さな手にあったのは元は白かったであろう黒く汚れてしまった布であった。

「大丈夫だよ、樹くん。あそこの公園の水道で洗おう。」

彼の手を取り公園まで歩いていき一生懸命にハンカチを洗う。

しばらくするとようやく元の色がはっきり分かってきて、

みると端に『ＩＴＳＵＫＩ』と刺繍が施されてあった。

「ほらっ見て！きれいになったよ。だから泣かないで。」

洗ってきれいになったハンカチで早速樹の涙を拭く。

「ありがとう。琴姉ちゃん大好き。」

元気よく走っていった樹を見送り自身も学校へ行く途中だということに気付く。

「あっーー！！時間っ。」

残り一分を切っていた。

急いで角を曲がり校門を駆け抜けて三階の教室へ向かう長い階段を

上る。

キーンコーン　カーンコーン

本鈴が鳴ると同時に扉を開けた。

「琴子、いつも通りだな。」

「あんにょんはせよ。」

「おはよう、琴子。」

これが朝の琴子の日常であった。

第六話　生徒会長の権威

「会長、この件なんですが・・・・・」

ここは藤ヶ峰高等学校・生徒会室、現在生徒会活動真っ最中。

全国的にも有名進学校として名高い藤ヶ峰高校では勉強だけでなく部活動、生徒会活動も盛んでとにかく自由な校風である。

特に生徒会活動は生徒の自主性を重んじており、学校行事などは生徒会が運営している。

また藤ヶ峰高校に通う生徒は将来を約束されたエリートばかりであり他校、企業、はたまた政府からも一目も二目も置かれている。

故に藤ヶ峰高校生徒会の権限は絶大だ。

ましてや藤ヶ峰高校の生徒会長となれば計り知れないほどの力を持っている。

昨年の十月、生徒会選挙をせずして生徒会長に就任した異例の人物がいる。

しかも普通ならば二年生がなるところを一年生が会長となったものだから最初は反響が大きかった。

だがその者の名を聞いた途端誰もが納得した。

その人物こそ杜崎（もりさき）　菜穂子（なほこ）であった。

「杜崎、サッカー部の予算のことなんだけど・・・」

「それなら話をつけときましたから、向こうの方々も承知してくださいました。」

「助かる～。本当仕事が早いわね。」

「いえ、せっかく生徒会長をやらしてもらっているんですからこれくらいのこと何でもありません。」

現在の生徒会は副生徒会長職が二つに書記、会計がそれぞれ一つずつと庶務枠が三つ

生徒会長の役職の八つのうち五つが三年生、庶務の二人と生徒会長が二年生だ。

先程菜穂子が話していたのは会計・三年の須和名（すわな）麻里子（まりこ）、

気さくな性格で生徒会役員の中で唯一菜穂子を呼び捨てにする。

「杜崎さんはよくやってるよ、驚くほどにね。さすがとでも言うべきかな。」

「当麻(とうま)先輩、とんでもないです。」

菜穂子に声をかけてきた微笑が印象的な人物は当麻博雅(とうまひろまさ)、

今期から副生徒会長を昨期では庶務を務めている。

彼を生徒会長に推す声が多かったのだが前会長が菜穂子をぜひ次期会長にと推薦したため

今の地位に就いた。

副会長という役職もあってか菜穂子のことをよく気遣ってくれている。

「杜崎は当麻のお気に入りだからね、たくさん媚売っときな。」

「おい須和名、変なこと言うなよ。俺は単に杜崎さんの仕事ぶりに感心しているだけさ。」

「普通に考えても出来ている会長さんだもんね。前会長が指名したのも分かるよ。」

「お二人にお褒めいただき光栄です。」

「そういう謙虚な所もほかの三年生が何も言ってこないうちの一つかもしれないね。」

「俺もそういうとこ好きだし。」

「ほらやっぱりお気に入りじゃん。」

彼女が藤の君と呼ばれる所以はここにある。
生徒会長＝藤ヶ峰高校の象徴となる人物なのでこう称されるようになった。
全国模試では常に一位をとるほどの秀才であり人柄も良いため人望が厚い。
また前述通り満場一致で彼女が会長になったことから
ほかの人にはないカリスマ性の持ち主であることがうかがえる。

今日の分の仕事も片づけ帰途につこうと校門を出たところで琴子（ことこ）に出会った。
「菜穂ちゃーん、生徒会の帰り？」
「そうよ。琴子は？こんな時間までいるなんて珍しいわね。」
「琴子はトラと遊んでたの。」
よく見ると傍らにでっぷりとしたトラ猫がいた。
「トラって・・そのままね。」
「トラはこのあたりのボスなんだよ。」

菜穂子はトラの前にしゃがみ喉を撫でると気持ちいいのかトラはゴロゴロと喉を鳴らした。

「それじゃ琴子、帰りましょ。」

「うんっ。トラバイバイッ！！」

二人の後ろ姿をトラは静かに見送った。

第七話　体育祭でマネーバトル（前書き）

五月といえば体育祭？ということで楽しい楽しい体育祭の始まりです。

第七話　体育祭でマネーバトル

今日は朝から天気がすこぶる良かった。

まさに体育祭日和。

「・・・・・・というわけなのでみなさんベストを尽くして精一杯励んでください。」

「以上、生徒会長のお言葉でした。」

檀上からの挨拶を終え降りてきた菜穂子（なほこ）にとっては生徒会長として初の体育祭である。

「おつかれ、菜穂子。」

「おつかれってまだこれからなのよ。」

侑子（ゆうこ）は競技開始前から半袖・短パンにハチマキをして気合十分だ。

「侑子ちゃん今年は絶対優勝するんだって意気込んでたもんね。」

「なんてたって優勝賞品が半端なく豪華だからねぇ。」

学校行事はすべて生徒会によって運営されている。

体育祭も例外ではなく生徒会役員が何もかも決めている。

そして今年は会長を筆頭に例年以上に優秀な役員が集まったため

行事が華やかかつ豪勢なものとなったのだ。

「なんせ金一封だもんね。」

琴子(ことこ)はプログラムの上に堂々と書かれた優勝賞品という文字を指さした。

体育祭二週間前生徒会から発表された優勝賞品によりどこのクラスもより盛り上がっていた。

通常学校行事の賞品で金銭を扱うのは如何なものか問われそうなところだが

そこは藤ヶ峰高校生徒会、教諭方も手は出せない。

「なぁなぁ金一封っていったいいくら入ってるんだ?」

「それは勝者のみぞ知れることよ。」

金一封とは発表されたものの金額は一切明示されていないので

生徒たちはいくら貰えるか興味津々である。

「ってことは勝つしかないねぇ〜、ねぇ侑子。」

千世子(ちよこ)はポンと侑子の肩を叩き侑子はガッツポーズをした。

「もちのろん!目指せ二年三組優勝!!」

「侑子ちゃん頼もしい。」

道場の跡取りで全国大会を幾度も優勝している侑子は学校でも飛び抜けた運動神経の持ち主で

体育祭などこういった場合中心として動くのはクラスの主力要員である彼女なのだ。

「よし！！みんな集まって！円陣組むよ！！」

どこのクラスもそれぞれ円陣を組み優勝に向けて意欲が高まっているといった感じだ。

二年三組も四十名全員が揃いいざ行かんという勢いだ。

「二年三組ーーー！！！絶対勝つ！狙うは優勝ただひとつ！！」

「「「「「おーっっ！！！！！！」」」」」

侑子の掛け声に合わせ皆の心も一つにまとまった。

いよいよ競技開始だ。

第八話　華麗な貴公子

体育祭一種目目は５０Ｍ競争。

まず男子の５０Ｍが終わり結果は中の下といったところであまり芳しくなかった。

「侑子ちゃーん。頑張れー！！」

次の女子５０Ｍ、二年三組の第一走者は侑子だ。

「きゃー永山先輩よ！！なんて凛々しいお姿なんでしょう。」

「頑張れ永山さん！クラス違うけど応援しちゃう！！」

学年・クラス関わらず女子たちからの黄色い声援が侑子に送られる。

「おっ、いきなり牡丹の君のご登場か。今年の体育祭は荒れそうだな。」

みんなの応援に振り返り爽やかに手を振る侑子はさながら王子様だ。

「永山ー！！しっかり走りなさいよっ！！我が二年三組が賞金を得るかそうでないかはあんたにかかってるんだから！！」

涼子が三組の席からメガホンで叫んでいる、彼女は今年特に体育祭に力を入れていた。

それはもちろん優勝賞金のためだ。

「金よ、金。所詮世の中は金が動くから人が動くのよ！」

彼女の名言通り賞金のためクラス一丸となり異様な熱気を醸し出していた。

「大丈夫、涼子。あたしに任せておけ。」

クラスに向けグーサインを出す侑子の王子様攻撃で十数人の女子が倒れる事態になった。

競技が開始して間もないのにいきなり保健委員は大変だろう。

「位置について」

スタートラインに立つ七人が走り出す準備に入る。

「よーい」

ピストルを天に向けスターターが合図するのを待つ。

ドンッ

合図音とともに一斉に七人が飛び出す。

が、最初のスタートがよかった侑子が頭一つ先に出た。

そのまま一気に加速し二番手に大差をつけて一着を獲った。

「いぇーい。」

Vサインをする侑子、汗一つかいてない。

「さすがね、侑子。」

「侑子ちゃん、かっこいい。」

「これで優勝に一歩近づいたねぇ。」

菜穂子（なほこ）、琴子（ことこ）、千世子（ちよこ）がそれぞれ労いの言葉をかける。

「さっすが永山ね。本当は全部の種目であんたを使いたかったのに一人五種目までって生徒会が制限つけるから・・・・・。」

恨めしそうにチラッと菜穂子を見る涼子に対し

「だってそんなことしたらおもしろくないでしょ。」

笑顔で返す菜穂子、そんな彼女に何か言いたげな様子だが涼子は溜息をついただけだった。

「そうそう、その方が燃えてくる。」

侑子は残りの四種目に早くも目を向けているようであった。

以後千世子はパン食い競争で堂々の二位を獲得、琴子は障害物競走で最後の借り物の商店街の渡辺（わたなべ）さんという謎のお題でパニくってしまいドベでゴール。

菜穂子は侑子とともに２００Ｍ・選抜リレーに出場し、好成績を収めた。

その後も侑子は快進撃を進め５０Ｍに続き１００Ｍ・２００Ｍ・選抜リレーにも出場し

全ての出場種目においてトップを独占した。

体育祭も終盤を迎えついに最後の種目を残すのみとなっていた。

只今二年三組の順位は一位と僅差で二位にとどまっていた。

「さぁ、ついに残す競技はあと一つ！頼んだわよ、Ｆ４。」

「これで勝てば確実に優勝、賞金もあたしたちのモノ。
やってやろうじゃん、完膚なきまでに叩きのめしてやる。」

一クラスから四名が選抜されて全２１クラスがし烈な争いを繰り出す

藤ヶ峰高校体育祭の名物――――――それが騎馬戦。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6518x/

なゆちこ。

2011年12月11日10時45分発行